

難民救援情報誌

トリアル・アンド・エラー
Trial & Error

—試行錯誤—

No.30

レバノン 緊急アピール

レバノンはまたもや激しい戦乱状態となった。

8月28日に始まり9月26日の停戦までは、1ヶ月にわたるこの内戦は、多くの死傷者と避難民の発生を招いた。報道筋の発表によると、9月12日までで多数の市民を含む約700人が戦闘により死亡、約1200人が負傷、左右両派民兵により虐殺された婦女子を含む民間人は、100人にも及ぶと見られている。

9月13日のUNHCR（国連難民高等弁務官）の発表によれば、援助を必要としている避難民は約14万人だが、この中には親類のもとに避難している人々の数は含まれていない。現地の新聞によれば、その総数は35万人にものぼるといふ。



ベイルートのレバノン軍 '83年9月2日 UPI・サン

レバノン内戦、援助待つ35万人

▶市街戦、砲撃、そして虐殺

8月28日、ベイルート国際空港近くにてイスラム教シーア派武装組織「アマル」とレバノン政府軍の戦闘が発生。このためベイルート国際空港は閉鎖された（1ヶ月後の9月29日ようやく再開）。

翌29日には戦闘は市内外に拡大、イスラム教ドルーズ派民兵、キリスト教右派ファランジスト党軍、国際監視軍米海兵隊、シリア軍を巻きこみ、レバノン戦争（75～76年）終了後最大の規模に発展した。

31日にはベイルート全市に、左派右派による無差別砲撃が加えられるなど、各勢力入り乱れての戦闘が続く。9月2日に一旦平静をとり戻すまでに600人を越す死傷者をもたらした。JVCベイルート駐在の竹内ボランティアの2日のテレックス連絡によれば、ベイルートの都市機能は全くマヒしてしまったということだ。

9月4日昨年の侵攻以来駐留していたイスラエル軍が、ベイルート東方シェーフ山岳地帯から同市よ

り南30kmのアワリ川以南へと撤退した。これにともない、シューフ山岳地帯ではイスラム教民兵とキリスト教右派ファランジスト党軍が戦闘に突入。激しい陣地争いを繰り返すこととなった。

シューフ山岳地帯における戦闘は日に日に激しさを増し、それにつれて外国勢力の軍事介入が顕著となり、最早内戦の域を脱し国際化の様相を呈して来た。5日PLO（パレスチナ解放機構）反アラファト派2000人参戦、7日国際監視軍の仏軍爆撃機・米F14戦闘機出動、PLO非主流派T54型戦車、35台出撃。8日米第6艦隊介入、12日イラン革命防衛隊員の参戦判明、16日レバノン政府軍戦闘機が75、76年内戦以来初めて戦闘に参加、18日リビアの最高指導者カダフィ大佐、レバノン派遣部隊（1500人）をシリア軍とドルーズ派の指揮下に置く」と声明。

戦乱の中シューフ山岳地帯では、相次いで住民虐殺が起きた。

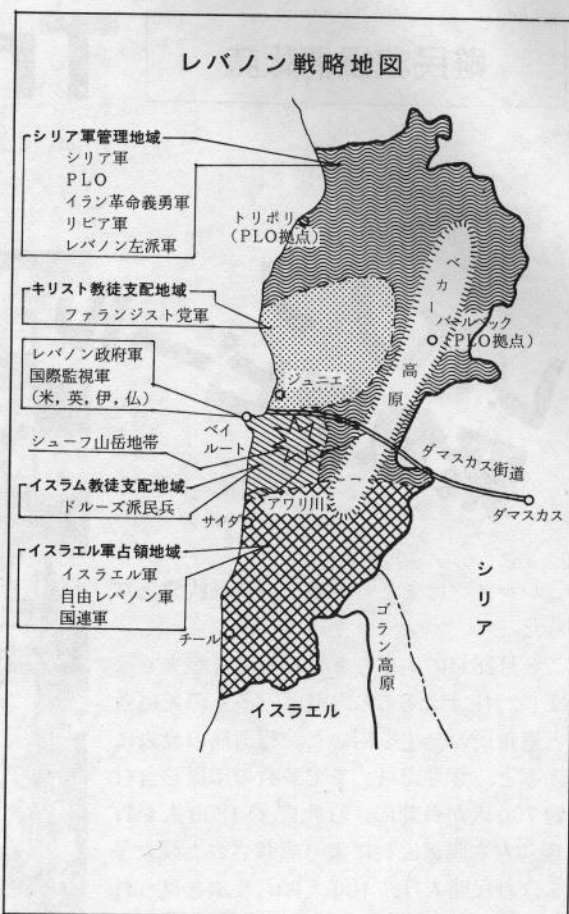
1日にはベイルート東方約30kmにあるマリアム村（キリスト教徒の村）で、多数の子供とキリスト教聖職者を含む計39人が虐殺された。5日ベイルート南東約20kmにあるクアアルマタ村（イスラム教ドルーズ派の村）で、住民約40人が虐殺された。10日ドルーズ派民兵がキリスト教徒の2つの村で140人虐殺、他にも数ヶ村にて宗教的反目による虐殺があった。

▶避難民、「苦しみはいつも弱者へ…」

『いつものことながら戦禍の被害を最も受けているのは一般市民です。（アームル代表カメルモハナ氏、緊急アピールより）』

各派入り乱れての戦闘が続くシューフ山岳地帯やベイルートからは、9月4日からレバノン人市民がレバノン南部へ避難し始めた。キリスト教徒の中には、イスラエル北部まで逃げていった者もあり、ホテル等に避難しているそういった人々の数は1000人を下らない。

9月12日付の朝日新聞はその状態をこう伝えている。『こうした中で、同山岳地帯に住む両派住民、とくにキリスト教徒は、着のみ着のままの状態での脱出地域からの脱出をはかっている。10万人から15万人に達するとみられるこれらの難民は、情勢が悪化する前、早めに逃げ出す経済的余裕のなかった人々がほとんど。脱出先の南レバノンやベイルートで、親類縁者に頼ったり、赤十字の援助で飢えをしのいでいる。』



▶今こそ本格的な救援活動が必要なとき

9月26日、停戦協定は発効し、約1ヶ月にわたる内戦に一応の終止符が打たれた。しかし、今回の戦闘の残した禍根は深い。

停戦成立後、ベイルートやレバノン南部へ避難していた人々の中には、シューフ山岳地帯へ帰る人も多いという。しかしそこでは、『家へ戻っても水も食べ物もなく、多くの人々は草花まで食べて飢えをしのいでいる（朝日新聞9月28日）』という。

ベイルート市内も停電、断水、電話の不通と、日常生活が正常に機能するには相当時間がかかりそうだ。

戦乱の中で傷つき避難して来た人達を保護しようと、数多くの団体が活躍している。9月9日の現地竹内からのテレックス連絡によれば、ICRC（国際赤十字委員会）は、シューフ山岳地帯からの避難民25,000人～40,000人に対して全力をあげて救援活動をしているということだ。各国の民間救援団体も精力的に活動を続けている。JVCが医師、看護婦等を派遣する予定になっているAMEL（アームル



レバノン赤十字本部，難民のための配給物資（タオル，石けん，下着等）が袋につめられている。

：レバノン民間救援団体を始め，MECC（Middle East Council of Churches：レバノン民間団体），レバノン赤十字，Italian Medical Deligate（イタリア医療団），Save the Children Federation（セイブザチルドレン），The Hospital Zahra 等がベイルートにて医療による避難民緊急救援を行っている。又，これ等の団体は「難民センター」にも緊急救援のため看護婦を派遣している。

彼らは「こういった時だからこそ援助が必要」と声を強めて言う。

JVCボランティアの足どりと戦況その周辺

8/11 竹内，シリアのダマスカスより陸路ベイルート入り

17 医師・看護婦受け入れ準備整う

23 活動地，医師—ベイルート南地区 AMEL の助産院，看護婦—ダルエスサウネの Terre des Homes の病院（外科病棟）に決定

28 空港周辺にてシーア派民兵と政府軍衝突，空港閉鎖

29 ベイルート市内外に戦闘拡大

30 泉（看護婦）日本を出発

9/ 1 マリアム村（キリスト教徒）で 39 人虐殺

2 ベイルートより，泉にアテネ待機を指示

4 イスラエル軍，シューフ山岳地帯から撤退，ドルーズ派民兵とファランジスト党軍の戦闘激化

ベイルートと山岳地帯から住民避難開始

5 PLO 反アラファト派参戦

クファルマタ村（ドルーズ派）で 40 人虐殺
東京より，泉にアテネ待機を指示

竹内，ベイルートの日本大使館にて，邦人のベイルート脱出について会合

7 米・仏戦闘爆撃機出動

8 米第 6 艦隊初の軍事介入

10 キリスト教徒の村 2ヶ所にて 140 人虐殺

12 14～15 万人のレバノン人がベイルート，レバノン南部に避難

泉，海路ベイルート入。日本大使館に連絡

13 JVC メディカルスタッフの派遣一時中止

14 AMEL からの＜緊急アピール＞届く

16 政府軍戦闘機出撃

泉，海路アテネへ退避

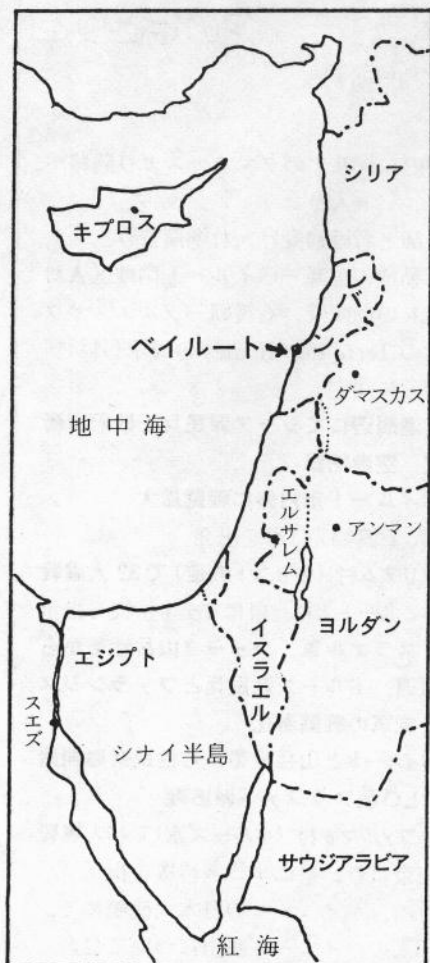
26 停戦成立

29 空港再開

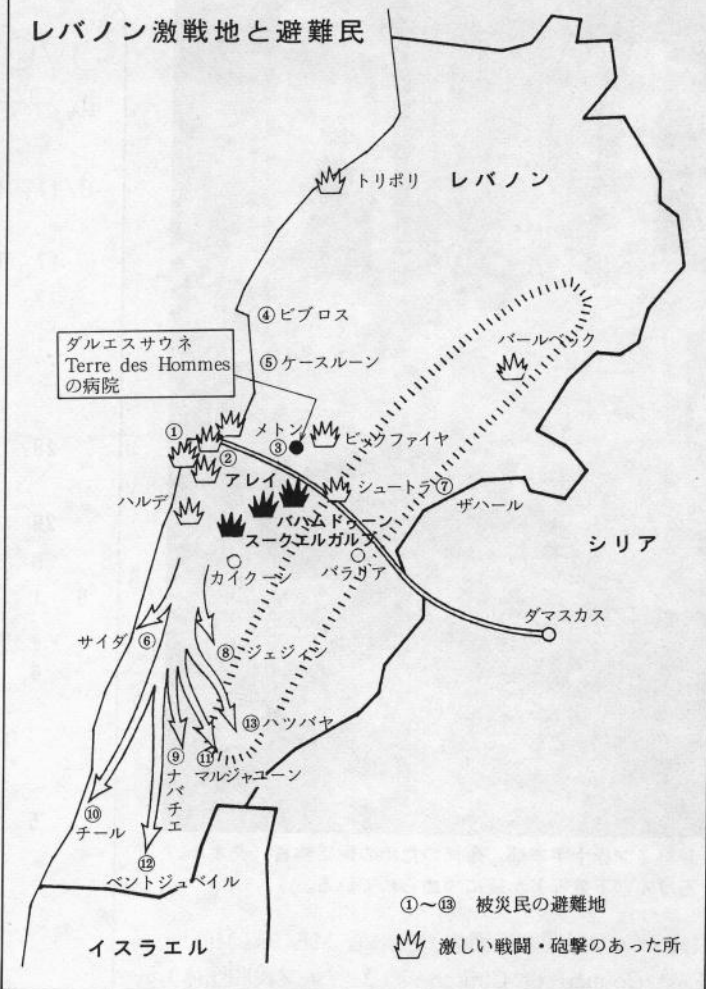
泉，アテネから空路バンコクへ

10月22日現在，竹内，ベイルートにて AMEL 支援のため活動中

レバノンとその近隣諸国



レバノン激戦地と避難民

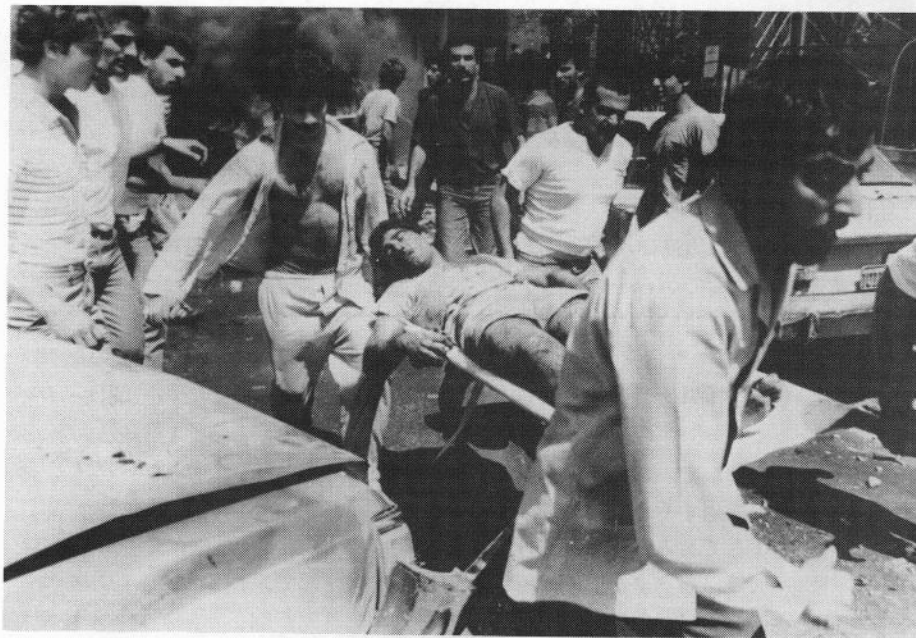
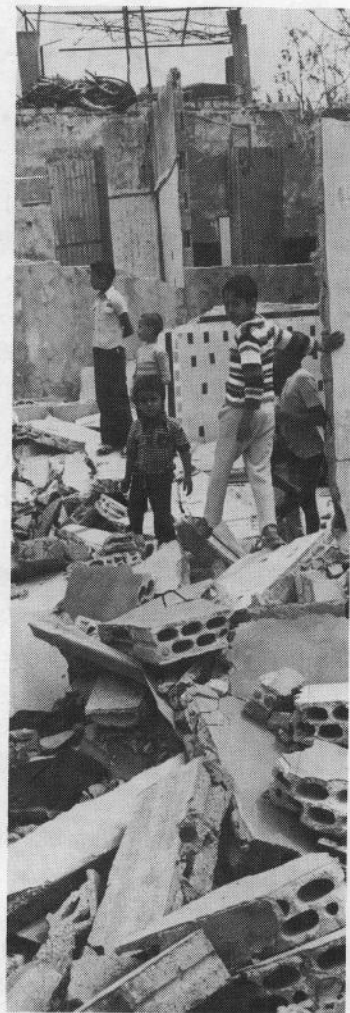
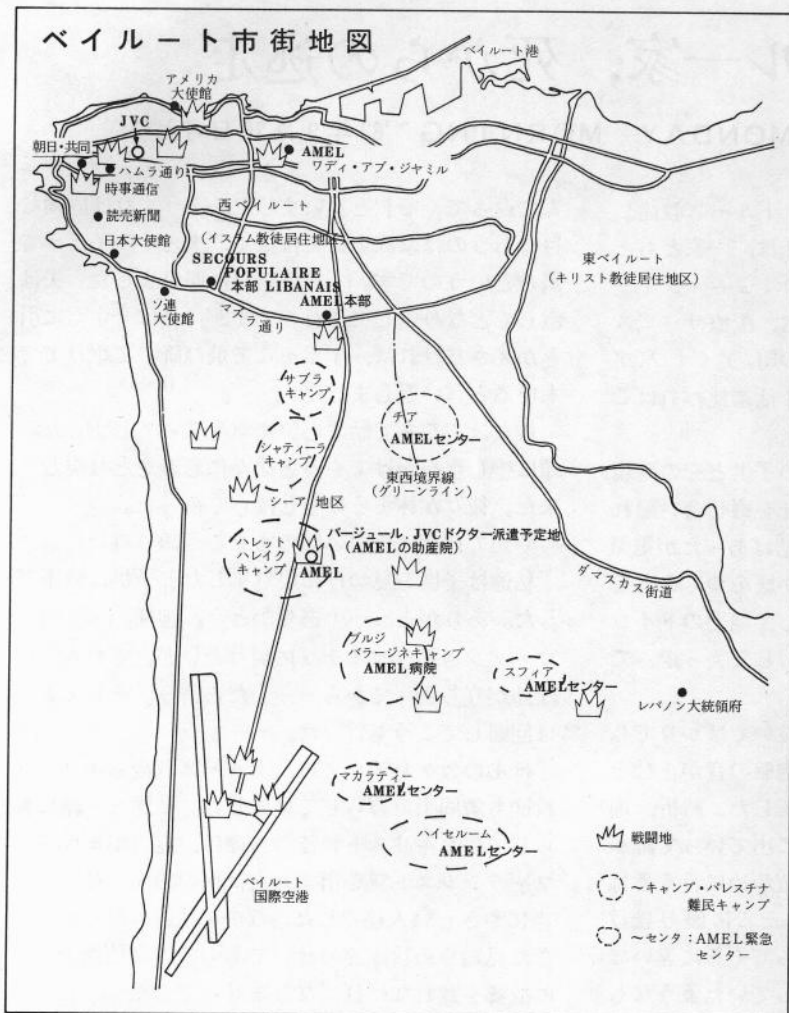


9月6日 レバノン軍とドルーズ派民兵との間の戦闘が続く地域から避難する市民達 UPI・サン

No.	地名	避難家族数	困窮家族数
①	西ベイルート	3,400	2,000
②	東ベイルート	4,100	1,600
③	メトン		
④	ビブロス		
⑤	ケースルーン	3,500	3,500
⑥	サイダ		
⑦	ザハール		
⑧	ジュジン	4,000	1,500
⑨	ナバチエ		
⑩	チール		
⑪	マルジャユーン	3,200	500
⑫	ベントジュベイル	3,000	3,000
⑬	ハツバヤ	2,500	1,000
合計		27,700	14,100

UNDRO発表 1983年9月30日現在
(レバノンの平均家族数は6人)

ベイルート市街地図



上：南レバノン、ブルジ・エル・シマリ難民キャンプ。空中爆撃による破壊のあと（UNRWA 提供）

左：西ベイルートの繁華街で車に仕かけられた爆弾による負傷者
9月4日 UPI・サン

シャール一家、死からの逃走

—レバノン英字情報誌“MONDAY MORNING” ’83年9月26日号より—

ワーデン・シャールさん(35才、ドルーズ教徒)は、7人の子供の母親である。現在は、一家ともどもベイルートにある「ドルーズ・コミュニティセンター」で食糧と住居を与えられ、医療サービスを受けている。過去数日間の故郷の町、アイナブ(アレイ地区、シエムウン近辺)での生活に比べればここでの生活は満たされている。

アイナブでは、戦闘の最中7人の子供とその両親は、昔倉庫だった建物の地下室に身を寄せ合い隠れていた。そこにはわずかな水と缶詰はあったが電気も、便所も浴室もなかった。食糧が底をつくことを怖れて、食事は一日に1食だったし、地上のトイレへは何時間も待った揚句、危険を冒して突っ走って行ったものだった。

「子供達は、手で耳をふさいで泣いてばかりでした。砲撃は一日中続いて、大きな砲撃の音が止むと次は銃撃が始まるといったぐあいでした。時折、地上で叫び声が聞こえましたが、外に出て行って誰がけがをしたのか、殺されたのか、確かめに行く者はいませんでした。私達は昼も夜もそこに座り続けて、次の砲弾こそは私達の上に落ちてくるに違いないと思っていました。死ぬのを待っていたようなものでした。」

ワーデン夫妻は、座して死を待つより、せめて脱出を試みて死ぬ方がましだと決断し、あたりが一瞬静まった時、車めがけて突走った。

「車はやられてませんでした。ありがとうございます。ベイルートに向け走り出したところで子供が一人足りないのに気づいた。「私は夫にすぐ戻るように言いました。しかし夫は、『今引き返すのは間違い沙汰だ。おまえ達をベイルートに連れて行ってから—

人で返ってくる』と言いました。そうすれば危険な目にあうのは家族全員ではなく、夫とその子だけで済むというのです。」「私は叫びに叫びました。夫は激しくどなり返してきたのですが、私は今すぐに引きかえさなければ、すぐそこで飛び降りて駆けてでも戻ると言い返しました。」

彼女はここまで話すと急に気を失ってしまった。顔に少し水をかけてやると徐々に意識をとり戻して来た。彼女が休まるのをしばらく待った。

やがて彼女は蒼白い顔のままこう語り継いだ。「私達は子供を見つけに戻りました。子供は無事でした。ありがとうございます……ありがとうございます、神様。」

ワーデンさんはアイナブに戻りたいが、それも「兵隊達が立ち去ってから……」だと言う。そして彼女は回顧してこうも言った。

「ほんの数ヶ月前までは、ドルーズ教徒もキリスト教徒も隣同士で暮らしていました。私達と一緒に暮らしていたキリスト教徒の人達は、党(編集部注、ファランジスト党を指す)とは何の関係もなく、本当にやさしい人達でした。なのに私達の町にやってきた見知らぬ兵隊達のせいであの人達は私達より先に故郷を離れなければなりませんでした。」

この8年間の戦争の間中、あの人達は私達の結婚式に出席し、私達も同様にしました。あの人達はお葬式にお悔みに来てくれるし、私達もそうしました。私達は喜びも悲しみも分かち合ってきたのです。しかし、すべては、あの見知らぬ兵隊達がやって来たときに変ってしまったのです。彼らが立ち去りさえすれば総て元通りになると信じる以外にありません。」

※邦訳は編集部による。

テレックス連絡から

竹内 俊之(在ベイルート)

9月4日発

イスラエル軍がシューフ山脈より移動して、数時間以内には撤退予定。イスラエル軍が撤退する今日は、レバノンにとっては運命の日となるであろう。なぜならばファランジスト党、ドルーズ派、レバノン政府軍による戦闘の初まりを意味するからだ。砲撃

はすでに始まっている。この戦いは75年の戦闘とは非常に状況が異なっている。この戦闘は一旦勃発すると、各勢力が複雑にからみ合い分散しているため、住民はどこへ避難していいかわからない。逃げ場がない。

9月7日発

9月6日に日本大使館で、ベイルート脱出について会議がもたれた。読売新聞、トーマンは本社命令



ドルーズ派民兵による、キリスト教徒村の包囲に抗議する婦人、ベイルート、10月1日 UPI・サン

停戦—レバノンその後

ベイルート南部のスラム地区やシューフ山岳地帯では、小競り合いがあるものの、9月26日からの停戦は一応持続されているし、3つのグループとレバノン政府軍から成る安全保障委員会はすでに何回か会合を開いている。ベイルート国際空港は再開され一般の輸送が可能になった。中東航空は多くの需要に対処するため、キプロスへの折返し運行を行っている。多くの人々はレバノンへ戻るためキプロスの空港へ殺到した。一方、何百人もの人々がレバノンから流出した。

難民の多くは、停戦が破られるのではないかという恐れから、ベイルートに30以上あるセンターにいままだ留まっている。多くの人々、特に救援活動をしている人達は停戦の信用性に対して懐疑的である。

AMEL のボランティア達は、次の戦闘に備えてベイルート南部郊外にいくつかの救急センター（病院）を建てようとしている。MSF (Médecins Sans Frontières) の2人の医師（コーディネーター）が麻酔医と手術補助看護婦と共にベイルートに到着した。彼らは、チアの AMEL の救急病院で活動する予定。現在彼らは医療状況を調査するために、シューフ山岳地帯にいる。その他の医師達は、緊急の派遣に備えてパリで待機している。

により閉鎖。キプロスへ9月8日引きあげる。大使館もなるべく日本人がベイルートより脱出することを望んでいる。竹内自身は最後まで残り、脱出する場合大使館のメンバーと共に行動をする。大使館でも避難方法はまだ決定していないが、現時点では南レバノンからイスラエルへ行くのが一番いいと考えているようだ。

9月9日発

レバノン緊急事態に対する国連の対応

駐レバノン国連調整官イクバル・アクンド氏は9月16日、救援活動を調整する機関を準備した。

1. 昨年の緊急時と同様、国連の常設調整委員会は民間救援団体、国際機関、レバノン国内の宗教団体を含む会議に拡大された。
2. 各機関・団体の配置

援助計画立案・調整：UNHCR（国連難民高等弁務官）、UNDRO（国連災害復興調整官）、UNICEF（国連児童基金）

避難民の調査、必要な援助の査定、救援物資の配給：UNHCR、ICRC（国際赤十字委員会）、MECC (Middle East Council of Churches)、SCF (Save the Children Fund) CRS (Catholic Relief Services)、OXFAM (UK)

保健衛生：WHO（世界保健機構）UNICEF、ICRC、レバノン赤十字、MECC、SCF (US) SCF (UK)、イタリア政府援助（二国間）

輸送：WFP（世界食糧計画）、OGER-LIBAN 物資調達・保管：UNICEF、MECC、SCF (US)

情報・広報：UNIC（国連情報センター）、UNICEF

3. 委員会は、国連本部、レバノン政府と連絡をとりつつ、情報交換と各団体の活動および寄付金品を調整配分して援助の重複を避けるため、最低週一回会合を開いている。

注 OGER-LIBAN は政府と緊密な連絡を持って再建と公益のために機能している建設会社。MECC はこれまでレバノンにおける UNHCR の計画遂行機関として重要な役割を果たしている。

状況はよくなる見込みはない。この日本人は、何人か国外に避難した。レバノン人も 35,000 人が、ベイルートから国外に出たそうだ。国際監視軍は、厳戒体制をしいている。ラジオはシリアとPLOが介入すると報道している。9月7日の ICRC の呼びかけで、シューフ山岳地帯で停戦が実現。ICRC によると、25,000 人～40,000 人が避難してきたとのこと。ICRC は全力で救援活動を遂行中。

AMEL APPEAL

—在ベイルートJVCメンバーからの緊急報告—

1983年9月14日付

レバノンでまたも大規模な戦闘勃発。日本からの緊急救援求む。

レバノンの民間救援団体 AMEL (アームル) は戦禍に苦しんでいる人々を救援するため「緊急アピール」を行なった。以下はアームル代表のドクター、カメル・モハナによるアピールの一部である。

いつものことながら、戦闘によって最も被害を受けているのは一般市民である。

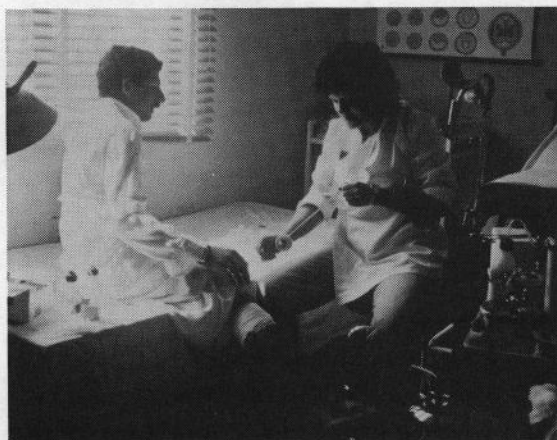
75,000 人にもよる多くの民間人がベイルートを逃れ南下した。シューフ山岳地帯での戦闘を逃れた他の民間人は戦火を逃れ、ベイルート市内の空家に仮り住まいしている。

我々(アームル)の CIVIL DEFENCE TEAM (市民防衛チーム) は救急活動を続け、そのセンターは南地区スラムで中心的役割を果たす様になった。又、センターのあるバージュールの避難所の中に救急センターの設置を計画している SECOURS POPULAIRE LIBANAIS (レバノン人民救援会) との協力体制もできた。

OXFAM UK (オックスファム: イギリスの民間救援団体) は 22,000 レバノンポンド (約 100 万円) を救急車購入のために寄付してくれ、それによって市民防衛チームの数が増やせる様になった。地域の衛生団体と ICRC (国際赤十字委員会) との接触の機会も増えた。9月7日にはカメル・モハナが執行委員会を主宰した。

我々はこれまでの出来事と活動を見直し、以下の段階を決定した。

- 1) 全ての衛生団体を含む国家的緊急委員会を厚生省によって組織する努力を継続する。
- 2) バージュールとワディ・アブ・ジャミルにある 2つのセンターを強化する。スフィアのセンターには医療チームが確保されたので、間もなく再度機能することが可能となろう。また、ハイセルームのセンターへの医療スタッフも確保すべく努力をしている。
- 3) 市民防衛チーム (現在バージュール 2 チーム、ワディ・アブ・ジャミル 1 チーム) を増やす。こ



バージュールのセンター

れは 24 時間機能するものである。

- 4) ハレットハレイクにある我々の病院の避難所をいついかなる時、他のセンターが攻撃されても患者を受け入れることができる様にする。
- 5) ブルジ・バラジネ: 南地区スラム医療委員会と協力し、避難所を設けそれを緊急センターに移行する。
- 6) マカラティエのセンターが設置されている建物の 1 階を必要に応じて緊急センターにする。
- 7) 一般市民に向けて伝染病予防キャンペーンを行ない、緊急事態 (砲撃の際など) にどう対処するか指示を与える。

このようにして悪化する現状に対処していきたい。

*

アームルは以上の段階を踏んで進められる『緊急救援プログラム』に対する支援を様々な方面に向けてアピールした。

私 (竹内) は、緊急救援の段階には、JVC がメディカル・スタッフを派遣することは難しいと考えている。なぜなら、現在のところでは関わるスタッフ自身の経験や言葉などの質の高さが望めないからだ。

現時点では、彼ら (AMEL: アームル) の活動を資金的に支えるというのが最も適切な援助である。私はこれが、当分の間最も効果的であると強く感じている。

AMELとは

アームル(アラビア語で「働く」,「労働者」の意)
The Lebanese Association for Popular Action (レバノン大衆運動協会)

1978年に設立され、1979年にレバノン政府によって認可された。1975年以来つづいていた戦乱によって中央政府の権威は低下してゆき、増大する必要とはうらはらに医療福祉サービスのたちおくれが目立っていた。このような中で主に都市の医師・法律家・ジャーナリスト等の市民を中心にレバノン南部の地域社会の開発を目的として設立されたのがAMELであった。活動の全体を通して、大衆ならびに個人の自由の尊重と人権の擁護を基本理念としている。

実際の活動は救護法講座やワクチン接種運動等が多くのボランティアによって行なわれている。また

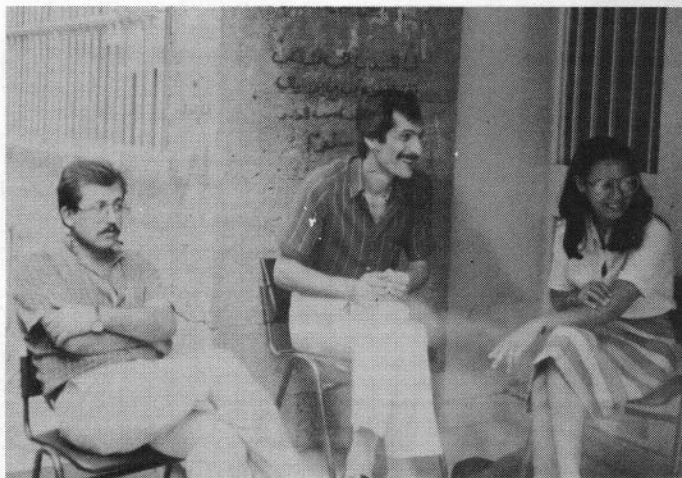
南部を中心に病院・診療所を運営し、職業訓練、就学前児童のための幼稚園、看護婦養成コース等のプログラムを実施している。

昨年のイスラエルの侵攻に際し、西ベイルートでの10ヶ所の緊急救護センターのうち3ヶ所を受け持ち、激しい爆撃の中で最後まで機能をせ多くの市民を救った。



上：9月に OXFAM の資金援助で買った救急車。アームルは常に中古車を買って来てそれにボランティアがみんなでペンキを塗ったり、ストレッチャーが入るように改造したり、サイレンをつけたりして使う。

左：DR.サーミー(左)はバールベック地区の責任者。DR.スヘル(中央)はシーマの救急センターの責任者。2人は82年の西ベイルート包囲の時にそれぞれ救急センターの責任者を務めた。



AMELの緊急救援医療活動に必要な資金

項 目	LL (レバノンポンド)	日 本 円
1. 医薬品(予防注射, 薬, ガーゼ等)	100,000	5,000,000
2. 市民防衛チーム コーディネーター給与 7人 7人×1,500 LL/月×12ヶ月	126,000	6,300,000
3. 輸血用ビン, 器具等	10,000	500,000
4. ボランティアに対する手当て(市民防衛員, 応急看護婦・医師)	25,000	1,250,000
5. 救急車 4台 4台×20,000 LL	80,000	4,000,000
合 計	341,000	17,050,000

JVCプロジェクト

1983年10月15日現在

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
カ オ イ ダ ン (カンボジア難民 キャンプ)	自動車整備学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、発電機の 整備技術を習得する。各3ヶ月、学生数約120名、	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会	嶋 紀晶※、松本 一仁 トンディ、ソムエック 稲垣三千穂
タイ・カンボジア 国 境	レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災 村の病院への巡回レントゲン診療。	日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 W.F.P./UNBRO	金子 一弘※、米田 省三 武田 長久、林 達夫 スラ・プロチョン サルミエント・ロドリゴ
	ナムコン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の妊産婦、乳幼児を対象とした補助食供給	W.F.P./UNBRO	大野 直樹※、イサラサック トンチャイ、プライサモン 近藤美佐子
タ イ 農 村	給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り、貯水タンクづくり	モラロジー国際 救援運動推進委 (MIRC)	木村 信夫※、スラボン 諸見里 勝
タ ケ オ (カンボジア国内)	井戸掘り 地域の診療所での井戸掘り	OXFAM モラロジーMIRC	簗田 健一(待機中)
バ ナ ニ コ ム (第三国定住待ちの 難民の一時収容施設)	日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエ ンテーション	天理教千葉 千 葉 県	佐藤 和美※、ティアン 佐久間正一、鈴木絵理子 森山久寿子、石丸 寧
クロントイ・スラム (バンコク市内の スラム)	電気工養成所 スラム住民のための職業訓練 電気工研修所 養成所終了者による電気修理 奨学金援助 スラム児童のための学費援助 図 書 館 子供たち、大人のための図書館	モラロジーMIRC 神奈川国際交 流協会 一般寄付	福村 州馬、釘村千夜子 イム、サムルアイ アルニー、坂場由美子 タウイチャイ、伊藤真理子
ソ マ リ ア (東 ア フ リ カ)	農業プロジェクト マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソ マリア難民に対する農業による自立促進プロジェ クト。	U N H C R 一 般 寄 付	柴田 久史、アリヤラトネ 税田 芳三 山賀 望幸
レ バ ノ ン (中 近 東)	医療ボランティア派遣プロジェクト ベイルートおよび南部レバノンでの、被災民(レバ ノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助。	一 般 寄 付	竹内 俊之
活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
東 京 事 務 所 (本 部)	渉外、資金調達、ボランティア調整、 会計、総務、情報収集および広報、T/E 発行	全 社 協 Y M C A 妙 心 寺 一 般 寄 付	星野 昌子(代表)、 熊岡 路矢(事務局長)、 田島 誠、荻野美智子、 本橋 栄、鍋田 三芳 他約20名
バンコク事務所	渉外、資金調達、ボランティア調整、 会計、総務、情報収集および広報		高塚政生(バンコク事務局長) 深津 高子、山西 映子 ボンビモン、カモン 森本喜久男、佐藤 正喜 小池 清治 他約10名
京都連絡事務所	渉外、ボランティア調整、募金、会計、 情報収集及び広報	支 持 会 費 バ ヶ ー 売 上	永井 聖子(京都事務局長) 他約数名

JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

●インドシナ難民救援募金（7・8月小計 381,264円）

東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

●ボランティア募金（7・8月小計 35,323円）

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

●クロントイ・スラム募金（7・8月小計 6,000円）

バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。

●デッグ・スラム奨学金（スラム児童奨学金）

バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらでも可。（7・8月小計 58,000円）

●JVC運営経費募金（7・8月小計 92,450円）

事務経費、人件費、通信費等、JVCの仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。

●アフリカ難民救援募金（7・8月小計 68,901円）

●レバノン難民救援募金（7・8月小計 153,591円）

南部レバノンの難民キャンプに7月より、医師、看護婦、検査技師、身障者のための療法士などを派遣活動資金を募っています。

●日本語家庭教師募金

定住難民の家庭は遠い所が多く、交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。

●医療募金（4月小計（7・8月小計 21,000円）

緊急医療活動のための資金となります。

郵便口座：東京7-96238

加入者名：JVC東京事務所医療募金係

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京9-27495

加入者名：JVC東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別に送金くださるようお願いいたします。

編集後記

停戦が成立したとはいっても、外国勢力の思惑が複雑に絡んで余断を許さない。いつ又、内戦が勃発しようとも不思議ではない。そういった意味でも、今回の「停戦」で問題が終わったという誤解を持つべきではない。過去10年の間に、レバノン市民は179回の「停戦」を経験している。新たな悲劇を生み出さないためにも、私達がレバノン問題に関心を持ち続け、国際監視の眼を離さないことが必要だ。これも、＜もう一つの救援活動＞ではないだろうか。

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円（1冊送付）

賛助購読者 1口 10,000円（4冊送付）

郵便口座番号 東京3-54186

加入者名 JVC東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。

JVCより

●JVC 会員募集のご案内

JVCは、難民および、開発途上国の恵まれない境遇にある人々への援助・協力活動を、より充実し息長く継続してゆくことをめざしています。

JVCでは、組織的な確立と不安定な財政状態の克服のため、会員制を基礎とする新しい組織を発足させたいと考えるにいたりしました。

すでに10月始めより、会員登録を開始しておりますが、まだ手続きがお済みでないみなさまには、この機会にぜひ会員として、JVCにご参加下さいますようご案内申し上げます。

入会のご案内および申し込み用紙は、JVCの事務所へご請求下さい。

11月5日（土）には、東京渋谷区千駄ヶ谷区民会館にて、2時より、第1回会員総会を開きます。

会員の区分と今年度の会費は次の通りです。

正会員	一般	5,000円
	学生	1,500円
	活動者	1,500円

賛助会員 金額自由

尚、現在Trial & Error購読者の方は、購読料を差し引いた額となります。（一般、2,000円、学生・活動者、無料）

JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア国内での井戸掘りを実施している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。

発行所 JVC東京事務所
〒166 東京都杉並区阿佐谷南
1-1-5 安田ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

バンコク事務所 Japanese Volunteer Center
67 South Sathorn Road
Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

京都連絡事務所 〒602 京都市上京区寺町今出川角
光月堂2F **TEL** 075(256)1382

昭和58年10月20日発行
毎月20日発行

発行人 星野 昌子
編集人 本橋 栄
田島 誠

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

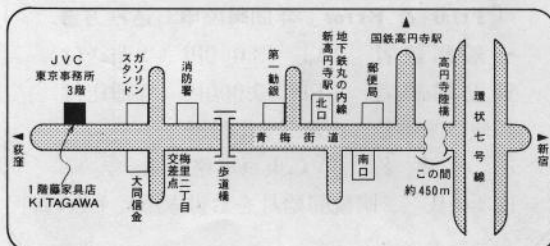


シャティール・キャンプ 撮影 森戸 幸次

『レバノン難民救援募金』 緊急アピール

JVCでは、レバノン緊急事態に迎え、これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため、**緊急アピール**を行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。**緊急アピール**に、一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。

英語・仏語の堪能な医師等も募集していますので、よろしくお願いします。



定価 送料共 200円